

## 異世界マンガ作画大賞 課題作品3（女子向け）

### ◆概要

大正末期、映画が大衆娯楽の王様だった頃。

不遇な華族の娘・千歳は、映画スター・香月鴻一郎の元に嫁ぐ。

### ◆キャラクター設定（以下3名のキャラクターデザインを作成して下さい）

#### ○香月千歳（かつき・ちとせ）

女性、18歳、身長150センチ

華族の出身。実家で継母に虐げられ、香月家に売られるようにして嫁いだ。

よく言えば控えめ、悪く言えば自虐的な性格。

実家で使用人同然の扱いを受けていたため、映画を観たこともなかった。

（外見、衣装）

小柄で、大人しい印象の美人。品の良い着物を着ている。

#### ○香月鴻一郎（かつき・こういちろう）

男性、26歳、身長180センチ

華族出身だが、家を飛び出して映画の世界に飛び込み、スターになった。

実家と断絶していたが、取引のために千歳と政略結婚する。

プライドが高く、なかなか素直になれない。

（外見、衣装）

背が高く、彫りの深い顔の美男子。ロンドンで仕立てたスーツを着ている。

#### ○大枝貴和子（おおえ・きわこ）

女性、15歳、身長155センチ

千歳の異母妹。母親と一緒に千歳を虐げていた。

映画スター・鴻一郎のファンだが、千歳の結婚相手が彼とまでは知らない。

（外見・衣装）

気の強そうな顔立ち。女学生なので、派手な着物に袴を合わせている。

### ◆背景参考

[https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%A7%E6%9D%B1%BA%AC\\_\(%E6%98%A0%E7%94%BB%E9%A4%A8\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%A7%E6%9D%B1%BA%AC_(%E6%98%A0%E7%94%BB%E9%A4%A8))

## ◆課題小説

(以下から一部シーンを抜粋して、マンガ4-8P分の完成原稿を仕上げてください)

千歳は目を見張った。

明治末期に日本にやって来た映画はたちまち人気を博し、今では各地で次々と映画館が開業している。——というのは知っていたのだが、初めて連れてきてもらった映画館は、まるでお祭りを建物ひとつに詰め込んだかのようなようだった。

壁の白さも眩しいモルタル造りの建物に、入り口には色とりどりの提灯、二階の窓から新作や俳優の名前を染め抜いた垂れ幕を何本も垂らしている。

呼び込みの声、遠くからは太鼓の音、そして集まった人、人、人。

「……あ」

垂れ幕のひとつに『星合鴻一郎』の字を見つけて、千歳は目を瞬かせた。

見知った単語に思わず足を止めた千歳の横を、数人連れの女性が通り過ぎていく。華やかなワンピースに髪も洋風に結い上げて、仲の良いお嬢様どうしといった風情だ。

「楽しみですわねえ」

「やっと鴻一郎さまに会えるんですもの、もう何日も寝られなくて」

「あちらは私たちなんて見ていませんけどね。スクリーンの中ですし」

「現実を思い知らさないでくださる!？」

その近くには、継ぎの当たった着物の娘もいる。手にあかぎれが見えるから、普段は女中として働いているのかもしれない。

「この方たちはみんな、旦那さまを観にいらしたんですか」

「全員ではないと思いますが。まあ、これでも映画会社では一番ですから」

隣に立つ背の高い男が、にこりともせず答えた。

星合鴻一郎は芸名で、本名は香月鴻一郎。

華族の出身ながら実家を飛び出して、身ひとつで“スター”に上り詰めた男。——そして、千歳の夫でもある。

(……旦那さまは、本当にすごい方なんだわ)

映画館に集まった人々を見つめて、改めて千歳は思う。

一方その鴻一郎はといえば、千歳を見下ろして少しだけ顔をしかめた。

「本当に、映画を観たことがなかったんですね」

「……はい」

労働者でもたまの休みには、小遣いを握って映画を見に行くくらいはするものだ。なのに千歳が映画館を訪れたことがなかったのは、彼女の生家もまた華族であり、大衆娯楽を貶む空気があったことがひとつ。

もうひとつは継母に家事をやらされていて、そんな自由はなかったから。

鴻一郎と結婚してからはいつも、自分の境遇が世間とは少し違ったこと、世の中の常識を

何も知らなかったと思い知らされる。

「……………」

俯いてしまった千歳を見て、鴻一郎が小さくため息をつく。

「ほら、行きますよ。あまり目立ちたくはないですからね」

帽子を目深に被り直してから、鴻一郎は先にさっさと歩き出した。

見れば建物の入り口に貼られたポスターに、新作の題名と主演の鴻一郎の顔が堂々と描かれている。なるほど、銀幕のスターと同じ顔の男がこの場にいると知られたら、集まった女性たちは大騒ぎだ。

背の高い鴻一郎はその分、歩くのも速い。千歳はそれを必死で追いかける。

「ねえ、鴻一郎さまが結婚したというのはご存じ？」

「昨日、雑誌で読んだばかりですわ。もうね、読んだ瞬間、卒倒しかけたわよ」

「お相手は名家のご令嬢ですってね」

「悔しいけど。でも、さすが鴻一郎さまよねえ……」

(……ごめんなさい。私はそんな立派な人間ではないんです)

人混みに何度も肩をぶつけながら、千歳は唇を引き結ぶ。

実家は名家だが自分はただのみっともない女だし、今だって鴻一郎に置いて行かれそうになっていて、見失わないだけで必死だ。この女性たちに自分のことを知られたら、どう思われるだろう。

\*\*\*

映画を観終えて外に出ると、ロビーは既にごった返していた。

鴻一郎たちは二階席で観ていたので、映画館から出るためにはまず階段を降りなくてはならない。だが階段もその下のロビーも人で埋まっていて、これでは当分、立ち往生となりそうだ。

さっさと観客を入れ替えたい支配人が階下で叫んでいるが、さて、何人の耳に届いているものやら。

「もう、恋人と死に別れるところで泣いてしまって。声を出さないよう必死だったわ」

「まだ話の序盤じゃないの。その先をどうやって観ていたのよ」

「そりゃあ、ずっと手巾《ハンカチ》を握りしめていたわよ」

「あたしはねえ、やっぱり敵に追われて……」

なにせ客は皆、観たばかりの映画について語り合うのに夢中である。

ちなみに映画の内容は、恋人を喪った男が死に場所を求めてスパイになり、敵国の女と新たな恋に落ちる……というものだ。腕利きの脚本家を連れてきてただけあって、勧善懲悪に留まらない深みのある話に仕上がっていた。主演した鴻一郎が偉そうに論評するものではないかもしれないが。

まあ制作側の鴻一郎としては、会話に夢中でのろのろ歩きの女性たちには苛立つけれども、客の反応が良かったと思えば満更でもない。

それにまだ映画の世界に浸っている女性は、鴻一郎の隣にも一人いる。

「ぼうっとしてると、階段を踏み外しますよ」

隣の千歳に声をかけたが、あの大人しい……良く言えば従順、悪く言えば卑屈な千歳が、返事すらしない。熱に浮かされたようにぼうっとしている。

(……ここまでのめり込むとは思わなかったな)

鴻一郎はかつて家を飛び出して映画界に入り、今も一族とは「華族の人間が映画に出るなんてみっともない」と冷戦状態にある。妻もしがらみのせいで華族から迎える羽目になったため、身内に理解してもらうのは諦めていた。

その妻の千歳が「一度、映画に出ている旦那さまを観てみたいです」と言うから連れてきてやったが、実のところ、何か変わると期待していたわけでもない。

けれども。

「ほら、降りますよ。後ろがつかえていますからね」

「は、はい！ 明石少佐！」

「……それは映画の中の話です。そろそろ現実に戻ってきてください」

鴻一郎はため息をついてから、ふいっと顔を横に逸らした。

「まあ……映画がお気に召したなら、良かったですけど」

耳を赤らめ、役者らしからぬぼそぼそ声で言う。

誰かが自分の演技で楽しんでくれるのは、やはり嬉しいものなのだ。

期待していなかった相手ならばなおさらに。それがたった一人、しかも金で買ったに等しい妻であっても、役者冥利に尽きるというものだろう。

本当のところは、もう少し。

千歳の感情をここまで揺さぶった悦びもあったかもしれないが、そこまでは鴻一郎自身もまだ気づいていない。

ようやく階段からロビーまで降りたが、まだまだ館内は人でごった返している。

「きゃ……」

「……っと」

隣の女性に押されて転びそうになった千歳を、鴻一郎がとっさに抱きかかえるように支えた。将棋倒しになりかけたところを鴻一郎が踏ん張っただけとも言いが。

ともあれ鴻一郎の腕の中に、小柄な千歳がすっぽり収まってしまう。

「大丈夫ですか？」

「……あ、ありがとうございます、旦那さま」

そう大きな声で話していたわけではないが、混み合って互いの肩がぶつかり合うような状

況なので、会話は女性にも聞こえていたはずだ。

謝ろうとしたものか、女性は二人を振り向いて「旦那さま、を見上げた。

鴻一郎は帽子を目深に被っていたが、いかんせん背が高いので、真下から覗き込まれると顔を隠しづらい。むろん鴻一郎も気を付けていたのだけれども、腕の中の千歳に気を取られた一瞬の出来事だった。

「——あ!？」

女性は鴻一郎を指さして、思わず叫ぶ。

「こ、こ、ここ、鴻一郎さま……」

おかしな大声にロビーに残っていた女性たちが顔を見合わせ、そして、

「なあに、みっともない人ね」

「鴻一郎さまが格好良かったって話？ そんなの、帰ってからにして欲しいわ」

「まあ。あそこの人、ずいぶん背が高いのね」

「あの男の人、もしかして——」

一度注目を集めてしまえば女性たちが鴻一郎に気づくのは一瞬だった。なにせ星合鴻一郎の新作を観にやって来た人々だ、わからないわけがない。

鴻一郎が小さく舌打ちし、そして、

「じゃあ、一緒にいるあの子は誰……？」

誰かが、千歳が決して聞きたくなかった一言を呟いた。